

巻頭

政府・東京電力は、すべての原発をストップし、福島原発事故の予想される本当の危機も含めた情報をすべて開示せよ！

天野恵一

三月一日からまったく別の世界。別の時間に滑り落ちてしまった。とてつもない無力感とひたすらなる焦燥感にまみれた日々が始まってしまったのである。

地震で本棚がいくつも倒れ、本の山でドアが開かなくなってしまった部屋を二日ばかりでこじあげ、なんとか机にたどりつけるようにした。その本の山の谷間に存在している机で、今この原稿を書き出している。日々確定される死者が増大し続ける中、直撃された「東北」の一瞬にして津波に家が人が街全体が、のみ込まれて行く映像が全局で一日中流されるづけているテレビを見続けている日々、そしてやつぱりの福島原子力発電所の放射能漏れの日々の拡大。くりかえされる余震に脅えながらの日々（余震への脅えは最大の被害地「東北」から「関東」まで文字通り地続きの事態）。そして始まった計画停電の名の無計画停電（東電による、原発がなくなると大変だぞ、との操作的キャンペーンと思わせるていもの）がうみだす生活パニック。国策として原発をつくり続けてきた原子力（電力）産業と政府は、最終的な危機にふれずに、まだまだ「安心」「安全」発表をくりかえしているが、そのキャンペーンに都合のわるい本当の事実発表されてはいない。

大地震という「自然災害」の恐ろしさに脅え、無力感に落ち込んでいられないと思ひ直して、いくつかの運動体の緊急会議に出席し、こんな時、私たちはどんな声を発し、どのように動くべきかの討論をしつつ、各運動体（個人）が連絡し合って、最低限の情報交換と、原発運動体を軸に据えて広くスタンスを共有するための会議をつくりだすべく、私は動き出した。

私たち「反安保実」と長く協力関係にある原発運動体「たんぼぼ舎」が緊急集会準備などで大忙しの状態であり、手伝いが必要との情報が飛び込んできた。満身に歩けないフラフラした闘病中の身とはいえ、なにか手伝おうと「たんぼぼ舎」につめた時のことである。そこには全国から（メールやFAXで）「パンフレット」の注文が殺到していた。私は、この「逃げ方パンフ」（植田敦著『原発事故の防災対策——早く10キロ圏外へ逃げること』）の発送のお手伝いから始めた。その作業中に注文FAXにある母親の言葉に胸をつかれた。「原発の危険は知識としては知っていたのに、ストップさせる運動を担うことをしなかった結果

ここまで来て、自分の娘たちの未来までメチャクチャにしてしまつて、どうしたらいいんだろう……」。

この途方にくれる母の言葉を読みながら、いつも不愉快な気持ちにさせられた電力産業のテレビCMの「この子たちの未来のために原発のクリーンエネルギーは必要だと思います」というセリフを思い出した。

もう一つ思い出したのは三月一日の次の選挙への出馬を表明した石原慎太郎の「やつぱり天罰だと思ふ」というハレンチな言葉である。この言葉は大量に生まれている被災者に「ザマーミロ」と言っているに等しい。どう弁明しようとも許されない言葉である。そして、FAXに書かれた母の思いを上から踏みこむ言葉である。さらにそれは核兵器まで含めた原子力エネルギー大肯定という今までの自分の姿勢に対する反省の気持ちなどこれっぽっちもない、傲慢のきわみともいふべき言葉である。そして、なによりも許せないのは、「人為」的に産み出されている被害を天災（天罰）という衣でつつみこんでしまい、その責任を問わなくてもよいものにしてしまう言葉である点だ。

今、政府・原発産業・マスメディアは「想定外」という言葉をくりかえしくりかえし、垂れ流している。ふざけてはいけない。地震列島日本に原発をつくれれば、いつかはこういうことになるという批判は、原発運動の内外にはあふれていたはずである。この危険は、間違いなく想定内のことであった。にもかかわらず政府・原子力産業・マスメディアは、安全でクリーンなエネルギーというイメージをふりまき、原発づくりをやめなかつた結果が、この事態をうみだしたのである。この無責任政府（なんと菅政権は、ベトナムに「地震に強い」日本の原発を輸出しようとしている）、無責任産業（資本）、無責任マスコミに、私たちの命がにぎられているという、ここで改めて露呈した事実の前に、今、私たちは「無力」感を強いられているのだ。

原発事故の実態について、徹底した情報開示をせよ！ すべての原発をストップしろ！ この声を政府に、原子力産業に、マスコミに向けて発する動きを拡大しぬこう！

（事務局）